

学 位 論 文 要 旨

氏 名 原田 美代子

題 目 自然が限定された保育施設においても実践可能な自然を活用した
保育プログラムの開発と効果検証

近年、幼児教育・保育の分野では非認知能力の育成が重視されるとともに、自然との関わりがその発達に重要な役割を果たすことが指摘されている。自然保育の効果としては、主体性・自立心、協調性・向社会性、知的好奇心・感受性、創造性・想像力、身体的能力など多岐にわたる特性の育成が報告されており、とりわけ自然物の多義性（用途が固定されていないことによる見立ての多様性）、偶発性（予測不能な出来事との出会い）、および活動における時間的・空間的自由度が、これらの特性を育む基盤的な環境条件として整理されている。しかし、都市部を中心に自然環境が限定される施設も増加しており、自然を活用した保育の実践が困難な状況が報告されている。また、自然との関わりの効果を検証するための評価指標も十分に確立されていない。保育者の97.7%が自然との関わりを重要と認識しながらも、十分に実践できていないというギャップが広域調査において明らかにされており、この問題は、特に園庭を持たない施設において顕在化している。

本研究は、自然が限定された保育施設においても実践可能な保育プログラムを開発し、効果検証の枠組みを構築するとともに、その有効性と方法論的課題を明らかにすることを目的とした。育成目標を、「経験や行動、出来事に対して、新規性があり、個人的に意味のある解釈」(Beghetto & Kaufman, 2007)として定義されるmini-cとした。mini-cは創造性の発達モデルにおける最も基盤的な段階であり、little-c(日常的創造性)、pro-c(専門的創造性)、Big-c(卓越した創造的業績)へと発展していく起点として位置づけられる。個人の内的過程による発現であるmini-cは、幼児では自己評価尺度による直接測定が難しいことから、Amabileら(1996)が提唱する領域関連スキルと創造性関連スキルからなる創造的活動を支えるスキル(以下、RS)の観点からその発現を捉えることを試みた。RSは、活動に関する知識・技術といった領域関連スキル、および知覚的・認知的柔軟性、仮説生成、試行錯誤、見立てなどの創造性関連スキルから構成される。自然物の多義性や偶発性、活動における時間的・空間的自由度が、幼児の多様な創造的表出を支える環境条件となり得るという理論的枠組みのもと、プログラムの開発と評価指標の構築を一貫して結びつけた点に本研究の特徴がある。本研究における「自然」は、草や葉・土・昆虫などの自然物のみならず、風・雨・光といった自然現象、さらにそれらを想起・媒介する音や映像・表現活動を含む、子どもが五感を通して自然性に触れる経験全体を指す広義の概念として定義している。

本研究は5つの研究から構成される。研究1(第4章)では、身近な自然物や自然現象の多義性・

偶発性を活用した6種類の活動(ミクロな世界の観察、葉のこすり出し、匂いや音の探索、どんぐり遊び、葉と雫遊び、種と風遊び)からなる保育プログラムを開発した。プログラムは、心身の切り替えを目的とする導入段階(フェーズ1)、風や波の音など間接的な自然によって感覚を澄ませる段階(フェーズ2)、自然物・自然現象を活用した中心的活動(フェーズ3)の三段階から構成され、幼児が自らの感覚に意識を向け、主体的に意味を生み出していく過程を段階的に支える設計となっている。

続いて研究2(第5章)では、遊び観察に基づく効果評価方法を探索的に検討し、「遊び方の数」および「素材操作の工夫」を評価の観点として整理した。そして研究3(第6章)では、RSに基づく保育者評定尺度(幼児用創造性スキル尺度)を開発し、信頼性および内容的・構成概念的・併存的妥当性を検討した。この尺度は、幼児の日常生活や遊び場面を共にする保育者が観察・評定できるよう設計されており、従来の個別検査(TTCT・TCAM等)に比べ保育現場での活用可能性が高い点に独自性がある。さらに研究4(第7章)では、保育現場における予備的实践を通じてプログラムの改善点を検討し、最後の研究5(第8章)では、5歳児を対象とした本調査を実施し、開発したプログラムの効果を検証した。

その結果、自然が限定された施設でも導入可能な設計として開発した本プログラムは、幼児の気づきや見立て、試行錯誤を支える活動として機能し得る可能性が、保育現場における予備的实践を通じて確認された。また、RSに基づく保育者評定尺度は、効果指標として一定の有用性を示した。一方、遊び観察評定における評定者間一致の確保には方法論的な困難が伴うこと、短期間の介入では創造性スキルの変化を統計的に検出することが難しいことも明らかとなった。

なお、補足的分析において、創造性スキルの変化に幼児の事前水準が関与する可能性が示唆された。すなわち、介入前の創造性スキルが比較的低い幼児において、プログラム経験後の変化が生じやすい可能性がある。さらに、プログラム終了後に保育者から得られた語りでは、幼児の見立てや発想の広がりや日常の保育場面においても継続的に確認され、プログラム経験が日常の保育へと循環していく可能性が示唆された。このことは、構造化されたプログラムの効果が、その実施期間に限定されるのではなく、保育者と子どもの双方における自然との関わりに対する志向性を変化させる可能性を示すものとして、実践的観点から重要な知見と言える。

以上より、本研究はmini-cおよびRSの枠組みに基づく効果検証の方法論を提示するとともに、自然が限定された保育施設における自然を活用した保育の実践可能性の一端を示した点において、理論的・実践的・方法論的な意義を有するものと考えられる。